

魚卵アレルギー機序解明と治療および発症予防に関する研究

藤田保健衛生大学坂文種報徳會病院アレルギーセンター 小児科・教授 近藤 康人

■ 目的

イクラアレルギーは初回摂取で重篤な症状をきたし、近年、増加傾向である。その背景を探るためイクラアレルギー患者の母親に妊娠中と授乳中の摂取制限および、乳児期のアトピー性皮膚炎についてアンケート調査を行う。これと並行して、重症卵アレルギー患者であってもオボムコイド減量加熱全卵を含むベビーフードが摂取できるか試食試験を行い安全性についても検討した。

■ 方法

- 1) 現在通院中のイクラアレルギー患児の母親に対して妊娠中および授乳期における鶏卵摂取状況と乳児期のアトピー性皮膚炎の有無につきアンケート調査を行った。
- 2) イクラアレルギー患者血球でイクラおよび鶏卵黄に対するリンパ球の反応の違いを我々が過去にスギやミルクで報告した方法で検証する。うまくいけば、前方視的研究として、妊娠中および授乳中の母親に同様のアンケートを実施し、離乳食状況を確認しながら児のリンパ球採血およびイクラIgE抗体価の測定を定期的に行い、鶏卵黄(もしくは全卵)除去群と摂取群での発症予防効果を検討する。
- 3) 経口負荷試験で加熱卵白の2g未満で誘発症状を生じる重症卵アレルギー(卵白IgE: 平均 88.5 UA/ml)に、少量(2g～10g)のオボムコイド減量加熱全卵を含むベビーフード試食試験を行い、安全性および、治療効果について卵白、オボムコイドIgEと経口負荷試験で検証する。

■ 結果および考察

- 1) イクラアレルギー患者24名からの回答では、妊娠中および授乳中の鶏卵または魚卵の除去に関しては制限していないという回答が多かった。母乳栄養と乳幼児期のアトピー性皮膚炎の有無がイクラアレルギー発症に関与している可能性が考えられた。
- 2) 卵白、卵黄、イクラ(抽出した抗原蛋白の存在は電気泳動で確認)の刺激で、CD154陽性細胞の増殖が見られなかった。本法は抗原によって反応にばらつきがあるものと考えられた。
- 3) 加熱卵白2g未満で症状が誘発される重症卵アレルギー患者においても少量のオボムコイド減量加熱全卵を含むベビーフード(ベビーフードと略す)は毎日家庭で安全に継続できた。ベビーフード継続摂取4か月後で、0.1g卵白負荷試験が陰性化した症例があった。5例中の3症例で3～5か月後の卵白IgE値に低下が見られた。

■ 結語

- 1) イクラアレルギー発症の背景に、母乳栄養と乳幼児期のアトピー性皮膚炎が関与していると思われる。
- 2) CD154を指標とするリンパ球刺激試験は、抗原によって反応にばらつきがあると考えられ、うまくいかなかった。
- 3) 重症卵アレルギー患者においても、少量のオボムコイド減量加熱全卵を含むベビーフードは毎日家庭で安全に継続できていた。ベビーフード継続摂取で、0.1g卵白負荷試験が陰性化した症例があった。また一部の症例で3～5か月後の卵白、オボムコイドIgE値が低下した。